明治四十三年十二月二十一日第三種郵便物認可
明治二十一年一月二十八日內務省許可（毎月發行）

大正三年九月二十日發行

婦人衛生雜誌

第二百九十八號

婦人衞生雜誌

第二百九十八號目次

例會通知

暑中久しく休會致候處來る十月三日(第一土曜日)午後一時より神田區一ツ橋通り共立女子職業學校内に於て本會例會相開き左の講話有之候につき御知友御誘引御出席被下度候也

一、親の飲酒と子供の變質　　醫學博士　片山國嘉

一、時局と心理　　高島平三郎

大正三年九月

私立大日本婦人衛生會

尙ほ當日は本會總裁宮妃殿下にも御臨場あらせらるゝやに承り候へば會員諸姉には左樣御承知置願上候

私立大日本婦人衞生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んといと易からずこれ衞生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衞生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら從ふべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども尤の衞生の事に至りては更に注意を惹かざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因て頃日同志婦人集ひ談り一會を設け名けて私立大日本婦人衞生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衞生上諸般の講義演説談話をなし互に相研究し併之を筆記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡さんとす茲に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衞生會規則摘要

（明治廿二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衞生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり

●第二條　本會は私立大日本婦人衞生會と稱し之を東京に置き地方に隨宜支會を設く

●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

●第四條　入會の節は姓名族稱住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるへし入會者には會員章を交付す（交付手續は卷末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるへし

●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上、特別會員は一ケ月金三拾錢以上、通常會員は一ケ月金拾五錢を納むる者とす

●第六條　男子にして本會の旨趣を賛成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得

●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親或知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず

●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の御殿下に願出るゝものとす

●第十條　本會に左の役員を置く　會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員三十名、書記若干名

●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし

●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄事務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす

●第十三條　臨時指名委員の件

●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ケ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す

●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す

●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し緊要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又毎秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし

●第十七條　毎月學識經驗ある人々に衞生上の講義演說談話を嘱托し會員をして之を聽講せしむるものとす

●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は總て質素たるべき事）

●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁ず

●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと

●第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし

●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす

●第廿四條　會計は一ケ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會

●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得

●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす

●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得

●第廿八條　本會の雜誌は支會に同送すべきを以て其郵費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を購求する者に就きても亦同じ

●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

雜件

第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すへし

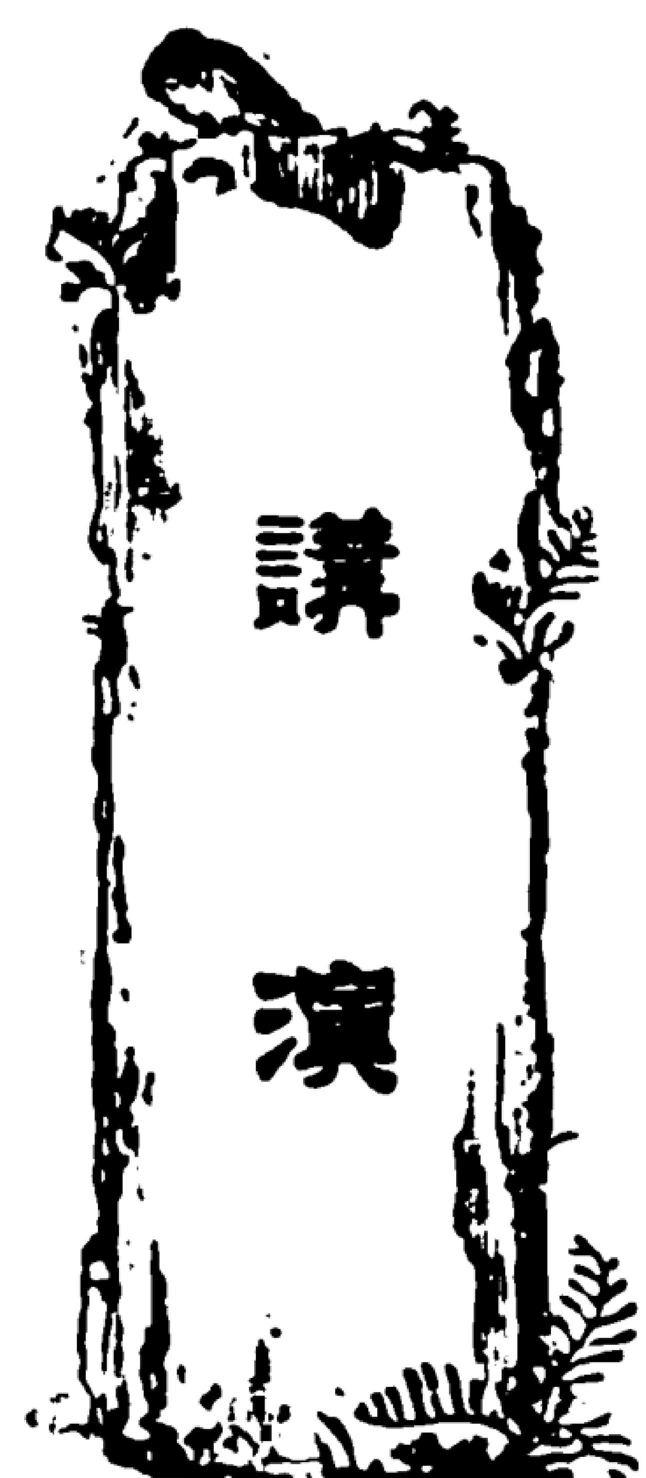
●第卅一條　會員又は會員外の者にして金錢若くは書籍物品等を本會に寄贈する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄附者の姓名及品目を雜誌に登錄し且本會雜誌を以て報告すべし

●第卅二條　會費金は受領證を交付すべし但し地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送付として別に郵信料を添へらるべし（郵送一冊增）

●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月集金人を差出すべし地方會員は總て前金とし振替にて口座番號東京一〇六〇〇番本會事務所宛に振出しあるべし

●第卅四條　會員中若し本會の妨害となるべき所爲あるか又は久く會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは忠告することあるべし

東京市麴町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衞生會



マリア、モンテッソリーと其の小兒養育所

これは獨逸の中學校教員のステルンと云ふ人が、モンテッソリーの小兒教育法を批評したのでありますが、モンテッソリーの教育法を紹介するに適當と存じますから、その大意を譯述して講演の代に致しました。

伊太利では近頃一種の教育改良運動が起りました。と云ふのは、吾々の小學校生徒が二年乃至三年かゝつて習ふことを、四歲乃至六歲の小兒に僅かに數箇月で覺えさすと云ふのであります、而かもその女教員の談によりますと、別に強ふることもなく、訓練すると云ふやうなこともせず、全く自然の方法に依て遊びながら容易に出來ると申すことで御座います。この方法の發明者たるドットレッサ、マリア、モンテッソリーは、『幼時に於ける自主的教育』と云ふ本を著して、その中にこの改良教育法を述べて居りますが、教育書としては、彼のエレン、ケーの『子供の世紀』以來、この位歐羅巴の教育界の評判になつたものはありません。

マリア、モンテッソリーが斯樣な教育法を發見するに至つた來歷を尋ねて見ますると、矢張他の教育上の發明家と同樣、大分廻道をしまして、最初は精神薄弱者、即ち多少腦に足りない所のある人の教育に從事して居りまする間に、漸次その本職を見出すことになつたのであります、マリア、モンテッソリーは女醫として羅馬の精神病院に助手を勤めて居りましたが、不幸なる精神異常者に對して興味を持ち、その專門分科の書籍に就て深く研究を致して參ります間

に、精神薄弱者教授法の創始者たるイタール及びセギン兩氏に依て多大の感化を受けたと云ふことであります。而して小兒は筋肉系統の教育から、神經系及び五官器の教育、概念、抽象的思考、道德的生活に至るまで殆ど手に依て導き得るものなることを學び得たのであります。且つモンテッソリーは、この方法は精神薄弱者に於てすら驚くほど良い成績を得るのであるから若しこれを普通の小兒に應用したならば、その人格の非常な發達を期し得る筈であると考へたので御坐いましたが、丁度又間もなくこの理想を實地に試みる好機會が與へられたのであります。

それは羅馬に建築改良會と云ふやうな一種の會が出來まして、この會では勞働者に安價くて衞生的の住居を供すると云ふことを努めて居るのでありまして、此等の勞働者の家では、豫備學校義務のある小兒を集めて女教員の下に教育しなければならぬと云ふので、そこで小兒養育所を設立することになり、マリア、モンテッソリーがその整理、指導の任に當たることゝなつたのであります。モンテッソリーは、この社會的の目的に教育的の目的を附加へまして、二歳半から七歳までの小兒は醫學的の監督保護の下に置き、衞生上の法則に從つて榮養され、モンテッソリーの方法に依て教育されることゝ致しました。

この教育法は、互に關連する二つの原則に基くもので、卽ち小兒の絕對的自由、女教員の絕對的傍觀と云ふことでありまして、教育的竝に教授的の感化は凡てこれを小兒の自發的感興、自發的活動慾に結付けるのであります。只斯の如く、この原則を守て、一般社會に必要な秩序の目的を達することが出來るのでありまして、小兒普通の活動心、又小學校に於て少なからず騷擾を來す所の小兒自然の不安は、共に規則立つた仕事に變へられるのであります。女教員は此等の事柄に就ても差控へて居りまして、指導は致しますが、教へませぬ。この理論の發展、就中その實驗心理學上の關係は不明で、證明が立ちませんが、兎に角マリア、モンテッソリーが、これを實地

に著手致しますと間もなく、世間の人は天才的の女教育家たることを認め、その觀察の行屆くことゝ云ひ、教育振と云ひ、實地上の巧者なこと、親切なこと等、凡て教育者として最も大切な特性を有して居ることを認めたのであります。

本來の教授は、同時に又意志の練習と云ふことに重きを置いて居るのでありまして、先づ小兒をして漸次社會生活に導き入れる爲に實際生活の練習をもさせるのであります、即ち自分で著物の脱著をし、食事を認め、お互に助合ひ、總ての整理を出來るだけ靜粛にすると云ふやうなことは、小兒の獨立心を養成し、社會上の義務に就て準備をせしむる手段であります。蓋し個人の自由は、共同生活の關係から、その限界がつくのであります。モンテッソリーは今日の體操教授に就ては餘り得る所あるものと思はない、その代りに階段を昇ること、園藝、談話の練習並に呼吸の練習等の如き實際的操練法を行はしめて居ります。

斯の如くにして多少社會的教育の準備が出來ますと、直ちに知識の教育を始めるのでありますが、その中心點は五官の系統的教育に置いて居りまして、その目的は、小兒に物の色や形やその性質を覺えさせるのではありません、注意、比較及び判斷に依て五官を鋭敏にし、反復練習することに由てその五官刺戟の差別を認識めることを纖巧にするといふのがその目的であります。この教育は幼時に行はなければならぬ、何故ならば幼年は五官發達の時期であるからであります。

それで總ての刺戟の差異に對して五官を鋭敏にするのでありますが、これには極粗大な對照から始めまして、漸次幽微な差別の出來るやうに指導して參ります。此際吾々の認識生活に取つて頗る大切な、而かも今日の教育に於ては至つて等閑にされて居る所の感官、即ち觸覺と云ふものには特に注意を拂ふのであります。先づ物の大さの差異を學ばせるのには木で造つた種々の太さ、種々の高さの分銅を恰度そ

れがはまるやうに出來て居る木の凹みに插込ませて

第一圖



遊ばせます、物の表面の形を覺えさせますのにも矢張これと同樣に、正圓、楕圓、三角、或は六角八角等種種の形の板を、各各相當して居る板の凹みにはめ込ませて遊ばせる、それから物の實質、その粗糙、滑澤の差異は、眼を縛つて手で以て區別させると云ふ風のやり方であります（第一圖）。この敎授法が如何に巧妙に取扱はれるかと云ふことは今玆に詳しく申上ることは出來ません

第二圖



から、書物に就て御覽になるより外致方がありませ

んが、兎に角非常に巧に此等の豫習が出來ますと、それから引續き書方、讀方、算方に移ります。これには砂紙で文字の形を截取り、滑澤な臺紙に貼付けて子供に觸はらせるのであります。それで書方の教授は眼に見える像に依らず、運動感覺と運動概念に依るのでありまして、讀方の稽古にも、動く文字形を應用し、これを子供が自分で言語に組立てるのであります。(第二圖)

偖てこの教育法の外に表はれた成績は何うであるかと申しますと、一體小兒は三年で物の形や體を知り、三年乃至四年で大小の區別を認識し、四年で書いたり言葉を組立てたりすることが出來るやうになるものでありますが、この方法に依りますと、一箇月半で以て此等の事を學習し、二箇月半の後にはインキとペンを用ひ、半年の後には小學校の三年(?)級位の程度に達し、五年で百まで數へると云ふことであります。而してこの程度で以てこの子供等を小學校の二年級へ入れるのであります。

以上はマリア、モンテッソリーの小兒教養所で實施して居る教育法の概要でありますが、この教育法に就ては又種々の批評がありまして、若しモンテッソリーが少しも小兒を強制せず又訓練を施さずしてこの成績を得るものと主張するならば、それは間違つて居る、これは矢張精神の熟練に由るのであつて、天才的の小兒であつても、普通の入學年齡では決して器械的作用なしにこれを能くし得るものでない、一體小兒自身の分別に依らざる所の教育は、慣らすことと云ふことなしには考へられぬことで、これには又一定の器械的練習を要するのである、然ればモンテッソリーの小兒教養所に於ても、矢張俗に云ふ通り煮るには水で煮るのであらう、實際さやうなことは羅馬大學教授のドクトル、ウムベルトー、サフイオッチー氏が親しくモンテッソリーの方法を視ての批評でも分かることで、小兒等は恰も自動器械の如く、その生活は、絲の見えない人形芝居の一幕を見るやうな氣がすると云ふて居る。尚ほモンテッソリーの鄕

里からの報告も別に良いと云ふ評判はない、小兒敎養所から出た小兒は小學校に於て別に他の小兒よりも勝つてゐる所はない、尙ほ又非常に早く知的敎育を施し得たからと云ふて、一體それが何の役に立つかと云ふ大問題が起つて來る。

以上はモンテッソリーの方法に對する一部の惡評でありますが、大體より見て、モンテッソリーの方法は新機軸を出したものとは申されません、その本元はと云へばイタール及びセギン氏が士臺を供したもので、元來白痴敎育の爲に考案された方法であります、その材料の取捨選擇は今日の實驗心理學及び五官生理學に依つたもので、眞にその新機軸とも云ふべきは、能く獨立原則の系統を立て、これを精細に實行する點にあるのでありますが、これとても精密に試られ、十分その目的を達し得たと云ふ譯ではありません、併しその全體に就て批評致しますと、確かに新機軸で又決して侮るべからざる效果のある方法と云はなければなりません、この方法の敎育の價値は主としてその各個の細やかな幾多の方法にあるのでありまして、これは又家庭、幼稚園竝に小學校の幼年の敎育に應用して確かに有效なもので、種種新しい道を示すであらうと思はれます。斯う云ふ譯でありますから、モンテッソリーの著書は、幼兒の敎育に就ては永くその影響を及ぼすことでありませう、それで此の書物を研究することは敎員竝に敎育家には勿論有益でありますが、自分の子供の發達を心理學的に攻究し、これを合理的に導いて行く時間と興味とを有して居る親達に取つても頗る有益な面白いものであると存じます。

（この「幼年時代に於ける自主的敎育」と云ふ本は、獨逸語にはドクトルカットー、クナップが譯して、スツットガルトのユリウス、ホフマンから出版致しましたが、英語及び日本語には譯されたか何うか存じません、何れ翻譯されるだらうと思ひます）。

叢談

航空術と衞生

莊司秋次郎

去る五日我が海軍飛行機は膠州灣及び青島上に長時間の偵察飛行をなし且つ爆彈を投下して敵の心臟を寒からしめたと云ふことでありますが、日獨戰爭當時は未だ斯樣なことは一寸考へられぬことでありました、物の進歩發達と云ふものは實に恐ろしいものであります。然し總て今日文明の利器として世に行はれ、非常の效果を現はして居る所の諸種の發明、諸種の器械等に就て考へて見ますると、何れもその始めは子供の惡戲、遊技のやうなことから漸次發達して來たものが多いのであります。斯うして見ますると小兒の空想、惡戲はなか〱馬鹿になりませぬ、大に尊重しなければならぬ譯であります、併し空想は空想、惡戲は惡戲で、善いとも惡いともつきませんどちらかと云へば兎角惡い方に、無益ぬ方に傾き易いものでありまして、これを善い方に、又有用の方に導き、實際世の中の役に立つやうに發達せしめますのには、科學の力に依らなければなりませぬ。それから、これが進歩し發達して行く間には、必ずこれに伴ふ所の衞生法が必要でありまして、衞生を無視しては決して人間に有益な大發達を遂げ得るものではありません、或は却て思はざる大害を醸すこともあり得べき譯であります。要するに、今まで人間が慣れてゐない生活を始め、新しい事に遭遇することになりますと、健康上に有益なこともありませうが、兎角危害が伴ふものでありますから、是非この危害を豫防し或は出來るだけこれを避けて、その有益な點をます〱有利に發達させる工夫が肝要である、即ちそれ〱衞生的の研究を要する

のであります。

只今普通の人々、殊に婦人方に對して飛行家の衞生を云々するのは頗る突飛なやうでありますけれども、必ずしも女飛行家の爲に申すのでは御座いません、今後遠からず、乘合飛行船が遊戲的に空中を逍遙するやうになるでありませう、恐らく海上の快遊船と同じ程度、或は更に船よりも安然な交通機關となるかも知れません、尙ほ飛行機上の衞生を考へますと、將來軍人として航空隊に屬することもあるべき男兒を育てる所の婦人は、今後如何に育兒上に注意しなければならぬかと云ふ點もありませうし、小兒が弄具の飛行機を持つて遊ぶ際にも、敎へ方があらうと思ひます、それのみならず、氣象、氣壓、高度の身體竝に精神に及ぼす影響に就て一般の生理を學ぶことが出來やうと思ひます、尤もこれに就ては今日尙ほ充分硏究が屆いて居りませぬから、二三の硏究家の說に多少の臆說を混へて御話するに過ぎませぬ。

昔々希臘の國にダイダロスと云ふ、我邦で申せば左甚五郎と云ふたやうな彫刻の名人が御座いました、但し左甚五郎は德川時代までも生きてゐた人ですが、これは人の歷史の始まる前のことで、物語に殘つて居る人の名で御座いますが、兎に角非常な彫刻の名人で、足や手を身體から取離して別に能く運動の出來るものに著更へたと云ひ、クレタ島の不思議なラビリント、迷宮もこのダイダロスが造つたと申すことでありますが、更に驚くべきは囚はれの身となつた時に、その獄屋を逃れんが爲に、自身竝に子息のイカルスの爲に蠟で以て羽を作つた、而して首尾能く逃れたは宜かつたが、子息のイカルスは調子づいで、飛ぶも飛ぶも、飛び昇つて餘り太陽の近くまで飛び昇つたものですから、蠟の羽が太陽の熱の爲に熔けて、遂に海のたゞ中に眞逆樣に墜ちて死んでしまつたと云ふ御話が御座います、これで見ますると、人間は遠の昔から空を飛で見たいと云ふ考があつたものと見えます、唐にも天竺にも大和にも

龍に乘つたり雲に乘つたり鶴に乘つたりして空を翔つた人があつたと申しますから、兎に角何等かの術に依て空も飛び得るもの、少なくとも飛べるものなら飛でも見たいと云ふ考だけはあつたのであります。

その後幾千年、西曆紀元十七、八世紀の頃に至りまして、再び空中旅行熱が高まつて參りましたが、一千七百八十三年、我國の天明三年に當りますが、佛蘭西のモンゴルフィエー兄弟がとう〳〵輕氣球を發明致すことに相成りました。その發明の次第を聞いて見ますると、或日のことモンゴルフィエー夫人が下著を乾燥かさうとして「ストーブ」の上にこれを吊して置いた所が、段々膨れて硬くなり、「ストーブ」の熱い空氣にあほられて少し升つた、注意深い子供はこれを眺めて不思議に思ひ、それから段々工夫を凝らして遂に輕氣球が出來たのだと申すことで御座います、それでこのモンゴルフィエーの輕氣球は、最初は球の下の方に孔があつて、それから火を燃して中の空氣を膨らして昇らせたものであつたさうで御座います。理學上の大原則たる引力說でも、電氣學の根源でも、大抵子供が林檎の落ちるのを不思議がつたり、紙鳶の絲のビリ〳〵するのを奇妙に感じたりして、それを空想に由て敷衍し、理性に由て解釋して遂に萬世不易の大眞理を發見し、人生に限りも無く廣大な利益を與へるやうになつたものが多いのであります、航空術の濫觴とてもこの通りでありますから、返す〳〵も子供の好奇心、惡戲と云ふものは畏るべきものであります。

さてモルゴルフィエーが一度輕氣球を發明致しましてからは、從來の空中旅行の空想は段々著實になりまして、天國に行くの月世界に昇るのと云ふ考は無くなりまして、却つて輕氣球を弄具にし、遊事に應用して滿足するやうになつたのであります。

御承知の通り佛蘭西はルイ第十五世時代には非常な贅澤な、我國で申せば所謂元祿時代と云ふ風で、貴婦人などの慰みに印度の黑奴を召使にし、奇怪な外

國料理を食ひ、極彩色を施した輕氣球に浪人を乘せ、往々極樂までも遣つたと云ふやうなことがあります。兎に角この時代の佛蘭西人は隨分思切つた面白い考を出しましたが、これを實際に進歩發達させる實力に乏しかつたのであります。此時代に最も流行致しました遊興に「ボムプ、エ、プリユイ、ド、フエー」と云ふものが御座いましたが、これは輕氣球に仕掛花火をしたものでありまして、ベルサイユ宮城の庭苑内で一晩に半月の租税をこれに費したなどと云ふ話が御座います。今日、飛行機や飛行船の上から爆彈を投下する目下の戰術と照し合せて考へますと、餘程こゝに密接な因縁があるやうで面白いと思ひます。この當時の繪を見ますと、モンゴルフィエーが可愛らしい傘をさして輕氣球の籃に乘つてゐる所がありますが、餘程評判の高かつたものと見えまして、香箱の蓋、陶器皿、暦の表裝、扇のやうなものまで盛にこの風船の模様が著いて居ります。

それから稍々下つてナポレオン時代になりますと、風船熱も降りまして、別に新しい改良發明もなく、輕氣球と云ふものは滑稽諧謔の材料になつて參りました。皿の繪に、ナポレオンが鵞鳥の羽を二本持つて風船の籃に吊垂り心配さうに手足を擴げて天に昇つて行く所などの描いてあるのが御座います。それから月世界の王國とか、風船人とか種々の冒險小說や滑稽談が出來まして、「ポンプ」仕掛の「ズボン」で飛ぶ人や、風船のやうな大きな腹で以て飛上る人などの御話もあり、又蛙を始めとして、牛も馬も飛で、全世界凡て飛行世界となつた所のポンチ繪なども御座います。斯樣な次第で、今日の最新發明の芽は、既に一千七百八十年の頃からあつたのであります。當時の諺に「無窮の天は吾々から取離されたが、モンゴルフィエーの天才の御陰でジユピターはその國を失ひ、か弱き人間が神々の許に近づくことが出來るやうになつた」と云ふやうなことが言はれて居ります。モンゴルフィエーの輕氣球は前にも申上げました通り、只空氣を暖めて昇るので、單に昇ると云

ふだけのことで甚だ危險なものでありましたが、後には水素瓦斯を用ひ、又石炭瓦斯を用ひ、漸次その構造も使用瓦斯も改良されて來たのであります、この輕氣球で以てこれまで一番高い處に昇つたのはグレーシア及びコックスウェルと云ふ兩人で海面上凡そ三萬五六千尺も上まで上つたと云ふことであります、富士山の三倍程の高さで御座います、これには大分おまけがあるものと思はれますが、兎も角も非常に高い處まで昇つたのであります。

それから單に高く昇るだけでは面白くない、恰も海上を船が通る如く梶を取つて思ふ方向に隨意に空中を翔ることの出來る航空船を造つて見たいと云ふ考も可なり古いことでありまして、最初は船と同じやうに大きな帆を張つて、風の方向に適合させて輕氣球を動かさうと企てたのであります、風船と云ふ名は蓋しこれに本づくのでありませう。然し忽ちにして又推進機を應用しやうと云ふ考案が出來ました、そこで先づ二本の捕鯨船の舵を打違に風船の籃に附けたのであります、それで恰も複軸の「プロペラ」のやうなものが出來た譯で、兎も角も推進機のある氣球が發明されたのであります、然しその動力の發明がなか／＼出來なかつたのであります。

飛行機の考案もその間に一再ならず試られたのでありまして、その原の形は一枚の板の兩端に綱をつけて、これに一つづゝ輕氣球を結付ける、而してその板の中央に人が坐はると云ふ名案で、なか／＼以て怖しい、非常に大膽な輕業師でなければ一寸出來ない藝であります。それから一千八百四十三年に初めて英國人のヘンソンと云ふ人が空中蒸汽車の構造を試みました、但しこれは永久に完成せられず、只石版畫の上で出來上つたゞけでありました。然し英國人は既に此頃からして空中遊技を軍隊用にしやうと考へたのであります。

斯様にして動力學、動力機械の進步發達を待つて漸次今日のツエッペリン式飛行船の如きものが出來、幾多の犧牲者を出しながらも年々改良に改良を加へ

て益々安然な危險少なき實用的の航空船が完成されつゝある次第であります。

尚ほこゝに面白いことは飛行遊技に於ても矢張子供等が優先權を握つたことであります、尤もその飛行機は飛びはしなかつたのですが、少なくともその裝置を構へたのであります。玩具屋がその模型を取つて早速製造し始めた、卽ち輕氣球に時計の撥條裝置を結付けて螺旋を卷いて放すと、空氣よりも重いけれども暫時輪を描いて飛廻るのであります。飛行機の模型は最初巴里市場から賣出されたのでありましたが、殆ど同時に墺太利の工藝家のクレッスがその滑走飛行機模型を賣りました。その中に又小さな木製の螺旋推進器で以て、奇麗な廉價いものが買へるやうになり、又ある悧發な子供が籐で以て甲板を拵へ、それに絹絲を張り、推進機には最も資本をかけて最新式に則り、四角の護謨紐の束で以て運轉するやうにしたものなどは頗る巧妙に出來て居ると云ふことであります、我國の子供等にも是非飛行機竝に航空術の要領を解說して聞かせ、將來の進歩を圖り度いものであります。

さて風船の御話は何となくフワ〳〵してよく締りがつかなかつたやうですが、餘り長くなりますから大抵この邊で絲を切放しまして、次に少しく航空術と衞生との關係を申述べて見やうと存じます。

一體あの自働車と云ふものは、飛行機が昇りそこねて地上を驅廻ることになつたものであると申すとで御座いますが、嘗て本誌上に於て衞生上より觀たる自働車の利害に就き、自働車の辯護說を御紹介致したことがありました、あれに依りますと自働車程衞生上結構なものは無いやうに聞えまするが、又遊技としての自働車乘に就て、ある批評家は斯う申しました。「左樣、塵埃と煤烟と蒸氣を被る機關手の仕事も矢張一種の遊技と云ふことが出來ます」。これは又皮肉な批評でありますが、自働車スキーの人は矢張いろ〳〵とそれ〳〵辯護を致します、何と云ふかと申しますと、成る程身體の弱い人は、最初強い風に

當ると、感冒に罹り、結膜炎、咽頭加答兒、齒痛、僂麻質斯などを惹起すことがあるけれども、少し慣れると云ふと非常に健康に效がある、運轉手のみならず内に乘つてゐる人にも佳良の作用を及ぼすものである、非常の勢で走る自働車の受働的運動だけでも、既に乘つてゐる人の血行全體の上に發揚的の作用を及ぼし、運轉手は常に危險を避け、障碍を免れんが爲に絶えず注意を拂ふので、單に身體を強くするのみならず、精神も意志も鍛錬される、且つ疾走に慣れて來ると、毎常も爽快な空氣浴をすることが出來、適當の服裝をして居れば、最も自然的に健康を催進する所の皮膚の「マッサージ」を受ける譯で、健康上多大の利益があると主張するのであります。然し自働車嫌ひの人に衛生上有害な點を擧げさせましたならば、決してその有益な點に劣らぬだけの害惡を數へるに相違ありませぬ、故に單に好き嫌ひの感情を先に立てゝ利害を說いては片手落になります、兩方の人の主張を聽て見ると、何方にも多少理由があります、決して好いことばかりではないが又惡いことばかりでもない、良い點もあれば惡い點も確かにあります。兎に角自働車の衛生上に及ぼす利害を考へて見ると。飛行機の衛生の一部分を推論することが出來ます、即ち非常の速力で風を切つて走ることが、衛生上に如何なる關係があるかと云ふことだけは同樣に論ずることが出來る譯であります。それで水平に走ることは分かつたと致しましても、飛行機では垂直に天上に向て昇ると云ふことが加はりますから、これに就て研究しなければなりません、所がこのことに就ては今日未だ餘り研究が屆て居りません、從來は主として氣象學並びに理學上の問題に就て研究されまして、航空家の身體及び精神上の關係は僅かに附錄的に調べられたのみで、能くは分かつて居りませぬが、最近これに就て特別の研究を企てた人も二三御座いますから、先づそれ等の人の說を御紹介致します。

インチアナポリスの一貴婦人は、種々の高さの空中

に於て音調に如何なる變化を來すかを試みんが爲に輕氣球に「ピアノ」を据付け、椅子を懸けて彈奏に支障のないやうにし　大約一千「メートル」の高さまで「ピアノ」を彈きながら昇つたと云ふことが「チーチア」と云ふ雜誌に御座いました、而して昇騰地點から十二「キロメートル」許り隔つた處に着陸したといふことですが、その成績は如何であつたか詳報を得ませんこれは音樂の試驗、樂器の檢査で、兎も角も航空界に於ける一新試驗でありまするが、動物の身體、特にその血液の狀態に就て研究する爲に輕氣球の籠の中に動物を携へて行つて、種々の檢査を行つた人は「プラッエーク」と云ふ人が初めてゞ御座います、而してその檢査の成績は更に生理學專攻の學者に依て研究說明されましたので、醫學上にも航空術の上にも有益なものであります。尚ほこのプラッエーク氏はこれまで幾多の飛行家が不幸の墜死を遂げましたが、その中には氣象の狀況から考へても、機械の方から調べて見ても、何うして墜落したものか少しもその原因と思はるやうな事を發見することの出來ないものがある所より考へて、これには恐らく高度の關係から注意力に變化が起るとか、判斷力に狂ひを來すとか又は外部の刺戟に對する反應乃至は情緒の變化とか、兎に角飛行家の精神狀態に變化を起して斯樣な不幸を來すことがあるであらうとの考より、有名な生理學者のレヴィーと云ふ人と共同して非常の高處は精神機能に不良の影響を及ぼすものかどうかと云ふことを研究して見ようと企てたのであります。

右の兩氏は直接に高空飛行家に就て研究することは見合はせ、先づ空氣を任意の程度に稀薄にすることの出來る研究室內に於て實驗を行つたのでありますが、その氣壓は四千「メートル」乃至四千五百「メートル」の高さに相當する氣壓を選びました、これはこの實驗を行ふ際までに飛行家が達し得た最高の「レコード」であつたからでありまして、これでも多少掛値があるものと見積つて四千五百「メートル」の

高さの處に相當すべき氣壓を限りとして實驗したのであります。

この實驗に依て示された著しい事實を摘つまむで申しますと、身體の働は精神の働よりも餘程早くその力を失ふものであると云ふことであります、これは飛行家が非常に身體の努力を要する一つの原因であつて、頗る注目すべき事柄であります。大體から申しますと、外から檢査した所では四千「メートル」以上の高處の氣壓の中に於ても精神機能は比較的影響を蒙らぬやうに觀えますが、然しその自身の感じは頗る強度で、十分注意が出來なくなり、精確に思ふやうに働けなくなる、これが特に危險なことであります。

斯樣に精神も身體も極めて安靜の狀況に於て行ふ所の實驗でも四千「メートル」乃至四千五百「メートル」からの高處の狀態になりますと右の如き著しき影響を受くるものと致しますと、實際の飛行家のやうに往々突風の爲に吹揚げられ吹下され、從つて著しい氣壓の動搖に遭遇することを考へ、更に非常の注意を以て、氣を張詰めて機體の平衡を保ち、絕えず舵の取扱に力を要し、天候や風の吹廻しに依ても方向を誤らぬやうに數時間持續的に全心全力を盡さねばならぬことを考へますと、その身體並に精神に受ける所の影響は遙に強大なものと思はなければなりません。これから推して想像して見ますと、これまで起つた高空飛行家の慘事も大抵解釋がつくことゝ思ひます、即ち飛行家が昇騰るやうな高處に於けるとは殆ど比較にならぬほど安靜な科學的實驗に於てすら、斯うしようと思ふ意志興奮が行爲に移る反應の緩慢となり、作業力を減じ、重き身體的症狀を呈して、更に著しく行爲を妨げると云ふ事實に鑑みますと、彼のシャペーの如き高空飛行家がその目的に達せぬ前に無殘にも墜死を遂げたと云ふのは、つまり急劇な高度の變化に逢ふて身體の故障が起り、意志力を喪ひ、如何なる大膽も沈勇もこれに對して何とも致方がなくなるものと說明する事が

出來るのであります。

右のブラッエーク及びレウィー氏の研究は、その試驗に際して呼吸の出來ぬやうな突風にも遭はず、感じの無くなる程の寒さにも逢はずしての話でありますが、實際飛行家は如何なる速度を以て空中を翔るか、その風の作用は如何に猛烈なものであるかと云ふことを考へて見ますならば、何うでありませう、自轉車でさへ少し寒い時は可なり辛い、風が身體全部を吹き洗ふときには盛に體溫を奪ひます、自轉車乘の如く手足を働かすならば、その運動に依て體溫の調節が出來ますけれども、飛行機上に在てはこれは出來ないのであります、故に皮膚の血管は風の爲に細くなり、後には痲痺して却て擴張し、多量の血液が皮膚の血管に集まるやうになるのであります。さうすると身體內部の血液が少なくなる、腦の血液も少なくなる譯であります、さすれば前に述べましたやうな著しい腦の方からの反應の現はれるのも不思議は無い、尙ほ風は直接に皮膚の感覺神經を興奮させるものでありますが、飛行家の如く非常の速度を以て空中を翔る場合には皮膚に對して起る所の空氣の反衝は實に猛烈なものであることが想像されます。

飛行機に乘せてもらつた素人の話を聞いて見ますと、天氣の好い風の靜な日に飛行機に乘つて二三百「メートル」位の所を飛廻る分には誠に爽快な者で、高い處に居るやうな氣がしない、案外乘心地の好いものであると申しますが、將來これが一層安然なものとなり、今日の自働車位の程度に使用されることとなつたならば、誠に結構な遊技であらうと思ひますが、それと同時にこの方面の衞生にも充分注意しなければなりません。

斯う云ふ立場からして航空家たるべき人の資格に就て考へて見ますると、身體も精神も極めて健全な人でなければならぬことが分かります、特に神經系統が健全で、外部の影響に對して強い抵抗力がなければなりません、それで今日軍隊の航空隊の練習生に

選拔される人の體格試驗は非常に嚴密なもので、本人の身體、殊に神經系統に少しでも異常のあるやうなものは採用されぬは勿論、その系圖の中に精神異常のものがあつても不可ない、酒を飲む者も落第である、それから精神も極めて確固とした人物で、意志の強健な人たることを要するのであります。將來小兒の體育に就ても、今日の健康標準を更に上せて、航空隊の士官たり得べき資格を以て標準として養育するやうに致したいと思ひます。

戰爭と酒

莊司秋次郎

昔から酒と云ふものは人を壯健にする妙藥であると信ぜられて居りましたから、何れの國の軍隊に於きましても平時は勿論、戰時には殊に必要なものとして、常に少しづゝ酒類を兵士に與へ、籠城とか戰鬪開始となれば非常に澤山の酒を準備したものでありました、これはつまり酒と云ふものは野戰に於て兵士の元氣を旺盛にし、忍耐力を強くし、戰鬪力を增すもので、風雨寒暑の爲に健康を害されるのを防ぎその效能は食物以上のものであるとせられたからであります、然るに近世に至て種々の實驗の結果に依りまするど昔の考は全く間違つて居つたことが分かつて來たのであります。平時に於きましても、兎角軍規を亂るものは酒を飲む兵士に多い、又病毒に罹るものも酒を飲む兵士に多い、例を擧げて見ますと印度の軍隊に於ける兵士の病氣に罹る割合を、酒を飲むものと、飲まないものとに依て百分率をとつて見ました所が、酒を飲まぬものは五・五、飲むものは一〇で、酒を飲む方の兵士は、飲まぬものゝ殆ど倍も病氣に罹てあるのであります。單にそれのみではない、酒は又軍人としての他の特性を害することが多い、先づ第一に射撃しても彈丸が確實に命中しなくなる、それから大事な歩哨に立つても酒を飲むでは睡氣を催して仕方がない、又咽も渇く、斯樣な風

でありますから意力でも、持久性でも、道德性でも、苟も兵士として必要な特性は、一般に酒の豐かな軍隊の方が、酒に缺乏してゐる軍隊よりも劣る、暑さや寒さに對しても酒を飮まぬ兵士の方が能く堪へると云ふことであります

これは決して平時に於てのみの話では御座いません實際戰爭に於て實驗され、證明された事實であります。今少しくその例を擧げて見ますならば、ラレーと云ふ人の「東洋に於ける軍隊の外科及び歷史」と云ふ著述の中には、千七百九十八年埃及戰爭の際に於ける禁酒は、大に成績が宜しかつたと云ふことを特に報告して居ります。又千八百十二年に、佛蘭西軍が露西亞から退却する際に、酒に醉ふてゐた兵士は最も早く行軍が困難になり、寒氣の爲に侵されて非常に苦痛を感じたと云ふことであります。又ホールと云ふ人が亞非利加のカッフエル及びクリミヤ戰爭に於ける實驗に依つて次の如く報告して居ります。

余の意見に據れば火酒、葡萄酒は勿論、麥酒と雖も決して健康維持上に必要なものではない、余の從軍した軍隊内で最健康なものは酒一滴をも有せず、而かもカッフエル蕃地の濕潤せる氣候の中に在ても、天幕或は其他の防備なくして、全く戰爭の艱苦缺乏に耐ゆることが出來、又病氣に罹るものは戰爭の終りに至るまで百人に一人の割合以上には達しなかつた、然るに再び歸營して普通の軍隊生活に復し、「アルコール」飮料を用うるやうになつたら、急に病氣に罹るもの丶數が多くなつた。

千八百六十二年に彼の「ポトマック」軍隊が、氣候の險惡なのに、麻剌里亞の流行してゐる土地に長途の行軍をした際に、之を指揮した將官は、兵卒の健康を增し、麻剌里亞などを豫防する目的で以て、士官及び兵卒は每日百五十「グラム」の「ウイスキー」を二遍に飮めと命令した、所が軍隊の健康狀態は豫期に反して著しく不良となり、指揮官は止むを得ずとうとう四週間でこの命令を取罷にしなければならなか

つたと云ふことであります。

ワイプレヒト氏は千八百七十二年に墺太利の北極探険隊に加はりましたが、この際傭入れた水夫は南方ダルマチヤ産のものであつた、それで寒さに慣れない彼等は北極に行つて何うであらうかと案じましたが、いよ／＼北極に參りまするど豫想外に活潑に行動して、寒氣に鍛へられた白熊と呼ばるゝ北極地方の「エスキモ」土人よりも能く働いたと云ふことであります。これはダルマチヤ人は生來「アルコール」類を好まず、これに反して北洋人は常に酒を飲むで暖を取る習慣がありますので、却て酒を飲まぬダルマチヤ人の方が極寒に對して強かつたのであると云ふて居ります。

今度は暑い方の經驗談でありますが、彼の有名なる亞弗利加旅行家のリビングストーンが、「私は二十年餘も絶對的禁酒の原則に從つて生活したが、私の考では、大なる辛苦艱難は酒類を絶たねば耐え得るものでない、」斯う申して居ります。又エウエリン、ウード氏は、『この三年の間に私は四回も喜望峯を回航したが、大洋航海船の燃えるやうな狹い室内で勞働する火夫は、熱帶に於ては水より外の飲料を飲まぬことを知つた』と申しました。

又千八百八十二年に英國の軍隊がアラビパシヤに派遣せられました時に司令官ウオルスレー氏は、軍隊に及ぼす「アルコール」の作用を試して見ようと思ひまして、甲乙の二隊に分ち交互に一方には酒を與へ他は全く禁酒生活を命じました所が、「アルコール」隊の方は、最初は活潑なやうであつたが、暫くして全く反對になり、元氣も體力も明かに禁酒兵に劣つて來た、そこでウオルスレー氏は爾後全く酒類の給與を廢して滿足の成績を擧げることが出來たと云ふことであります。

英國軍醫のパークスと云ふ人も、非常に困難の狀況の下に、兵隊に酒を飲ませて行軍せしめ、又禁酒して行軍せしめて見ました所が、矢張每常禁酒兵の方が能く行動し且つ持久し得たと云ひ、英國の軍隊で

はこの他にも種々「アルコール」と軍隊衛生との關係に就て有益な統計を出して居りますが、何うしても酒は軍隊の爲に有益で無い成績を示して居ります。尙ほ今回の歐洲大戰亂の先驅とも見るべきバルカン戰爭に於て、セルビヤの軍醫ポポビック氏は、從軍中に親しく觀察した「アルコール」の軍隊に及ぼす影響に就て述べて居りますが、それに依て見ましても「アルコール」は何うも軍律の上にも、戰鬪行動の上にも、健康並に手術の成績の上にも不良の作用を及ぼすものであると云ふことは確かなやうであります。セルビヤ軍では絶對に禁酒を命じたそうでありますが、ブルガリヤ軍では毎日「ブランデー」を與へた、土耳其軍は酒を飲まぬと聞いて居つたが、それは土耳其の舊教徒のことで、それも葡萄酒を飲まぬと云ふだけで、葡萄酒よりも遙かに「アルコール」分の強い「シユナップ」或は麥酒などは幾らでも飲む、而かも土耳其人は直に泥醉して行が亂れ易いと云ふことであります。セルビヤの軍隊も動員中は勿論、戰爭中も平素よりは酒を飲むものが多かつた、將校は少數の人を除くの外は殆ど總て酒を飲み、平時には飲まぬ人までも飲むだ、但し主として葡萄酒で他の酒類を飲むものは甚稀であつた、殆ど酒類を用ひなかつたのは砲兵隊の將卒で、最も能く飲むのは軍醫、殊に豫備役軍醫で、これは敵味方何れの軍隊に於ても同樣であつた、而して此等飲助の軍醫等は種種の口實の下に他の者をも飲仲間にし、これまで酒を飲まなかつたものまでも飲むようにした、軍醫が勸めるのであるから無理もない譯であります。

これに反して一般の兵卒及び下士は戰爭中殆ど禁酒した、これは酒類を調達することが六ケしいのと、司令部の方から少しも酒類を渡さなかつたからだそうですが、ポポビック氏は、セルビヤ軍の強かつたのは大にこれに關係して居ると申して居ります。

セルビヤ軍は往々攝氏二十度以下の寒氣にも遭ふたが、飲料水の疑はしい處では、茶と砂糖を與へたと云ふことであります、それからセルビヤの赤十字社

では種々の流行病の起つたときに、「ポランカ」鑛水と云ふ味の良い飲料百萬鎊を一般の兵隊及び將校に寄贈したが、これが至極宜しかつたと云ふことであります。

それでセルビヤ軍には泥醉して軍規を亂すとか甚しい病氣の爲に苦しむやうなことは殆ど無く、隨分烈しい勤務にも寒氣にも能く堪へ得たが、只二三回「アルコール」の爲に不慮の災害に逢ふた例がある、その一つは地方進擊隊の司令官で、大酒家の老豫備將校であつたが、千九百十三年六月三十日に、不意にブルガリヤ軍の襲擊を喰つて狼狽し、少しも防禦もせずに逃げて全く無抵抗でその陣地をブルガリヤ軍に取られて仕舞つたことである。第二の例は泥醉とまでには至らずとも、程好き飲酒でも矢張危險があると云ふ適例である、それは輸送船が著いて直ちに上陸すべき筈の所を、將校連が少しく酒が廻はつて居るので、船上で冷水灌注をやるのが好い心持だと云ふて、その爲に僅か三時間ほど上陸が遲れた、そこへ土耳其の軍艦「ハミヂー」號がやつて來て砲擊した爲に百名以上の死傷者を出し、船も破壞されたことである。

それからブルガリヤの兵隊は勿論、土耳其兵も戰爭中始終酒氣を帶びて居たが、此等の軍隊は機會さへあれば到る處で慘狀を極め、老若男女に拘らず暴行を加へ、名所、寺院、病院の如きものまでも破壞し敵の負傷兵屍體までも凌辱を加ふると云ふ有樣で、盛に掠奪し或は放火をした、斯の如き無法な事をしたブルガリヤ兵を捕虜にして見ると何れも醉ぱらつて居た、これに由てもその恐るべく惡むべき行爲は大部分「アルコール」の罪であると云ふことが證明される、全く白面の人間は、迚も斯の如き蠻行を敢てし得るものではないのであります。

尙ほ「アルコール」はブルガリヤ軍隊の軍律を亂し、負傷兵の手術の成績を惡くしたことは明かである。例へば決戰前にひどく酩酊してゐたラチンチエル將軍の率ひた軍隊は大打擊を蒙むつて全滅に陷つ

た、此の如き例は決して一二に止まらぬのであります。

何故多數の人は酒を飮むかと云ふのに、多數の教育ある人も一般の兵士も、「アルコール」は力を增し勇氣を奮はし、且つ病疾を防ぐ效があると云ふ迷信を懷いて居るからでありますが、私の同僚の一人は、平素禁酒家であるが、戰が始まつてから急に酒を呑み始めた、所が二週間の後に窒扶斯に罹かつた、これで見ても酒の效力説は誤つて居ることが分かる、これは實際戰爭中に觀察された多數の事實が證明して居る所であります。又多數軍醫の報告に據りますと、葡萄酒及び「シユナップ」の多く出來る地方の兵士の中には、酒を飮まぬ地方の兵士より流行病が烈しいと云ふて居る。又窒扶斯と虎列剌の療法に於て「アルコール」を用ひない方が、「アルコール」を用ひた場合よりも死亡率が二倍以上少なかつたと云ふことであります。

最後にセルビヤの負傷兵は總て只温かい茶を與へるだけで「アルコール」を與へなかつたが、ブルガリヤの軍隊及び看護長は盛に「コニヤック」を與へた、この對照に於ても「アルコール」飮用は、創傷の治癒に不良の影響を及ぼすことを示したのであります。

私の觀察し、經驗した所を綜合して見れば、他の多數の學者と同じく、この戰爭に於ても矢張り「アルコール」は大量でも少量でも軍規の上に、健康並に全般の成績の上に惡影響を及ぼすものであると云ふことを主張して憚らぬ。而して軍律なく、健康ならざる軍隊の敗滅すべきは疑のない所である。

最後に余は、戰爭と云ふものは人間の一大災厄であつて、啻に幾千萬の生命財產を亡ぼすのみならず、幾多の文明事業を破壞し、辛うじて得來れる人間の道德性をも廢頽せしむるものであると主張すると共に、戰爭と「アルコール」とは相提携して此世の一大災禍をなすものであると云はなければならぬ。

然れば苟くも文明の爲に盡す所の人は、世界の平和の爲に努力し、人道の名の下に、平時に於ても戰時

に於ても、あらゆる手段を盡して飲酒の習俗を排するに勉めなければならぬと思ふ。

以上は最近バルカン戰爭に於けるセルビヤの軍醫ポポビック氏が、實際に觀察し、經驗した所に基いての說であります。尤もこれは今日初めて知つた事實ではない、既に屢々經驗されたことでありまして、これが爲に多くの國に於ては、軍隊に「アルコール」を給與することを著しく減じ或は全く廢して、咖啡の如き他の嗜好品を以て代用するやうに努め、現に合衆國に於ては既に千八百三十二年、佛國軍隊にてはナポレオンの時代、クリミヤ戰爭の經驗からしてこれを實行するやうになり、プロイセンでは、政府側の軍隊改革の第一着として、ウイルヘルム第一世は、千八百六十二年二月十三日、即ち今から五十餘年前に勅令を發して、軍隊の給養には爾今「ブランデー」を廢して咖啡に代ふべしと命令致しました、又瑞典では千八百七十年、英國では千八百七十五年に等しく軍隊に火酒を供給するの制を廢して富國強兵の基礎を築いた、マダガスカルの佛國派遣隊司令長官チユセヌ氏も亦兵卒の「アルコール」飲用を嚴禁したのであります。然しなか／＼十分に實行はされませんで、今の獨逸帝なども時々海軍などに對して禁酒演說をして居ります、獨逸人の賭博と酒は全く滅亡しない間は止むまいと思はれます

露西亞兵も寒國のことゝてなか／＼酒には強い、彼の「ウオーツカ」と云ふ強烈の酒をあほるのでありますが、本年に至つて露國の大藏大臣及び內務大臣は同國民の酒精中毒の甚しき結果を示すと同時に消費稅務署長及び各州縣知事に向つて各飲酒節減に關する通牒を發し、更に陸軍大臣は、露國皇帝陛下の陸軍に對する禁酒の訓諭に基き露國陸軍禁酒令を發しました。

目下歐洲に於ける大戰爭の狀況を見ますると、獨逸軍は始の間は恐るべく優勢でありましたが、昨年に至つて、そろ／＼疲勞の狀態を現はし、敗走、退却の行動に移つて來た所を見ますと、相變らず酒の勢

で以て一時狂暴を働いたが、酒の補充が續かなくなつて醒めかけて來たのではあるまいかと思はれます。

我國の兵士、殊に今日の兵士は、比較的酒を飲むものが少ない、私の經驗する所では、從來少々は酒を飲むで居たものも、軍隊に入ると却て酒を止めるものが多い。酒保では酒を賣りますけれども、下士が飲む位のもので下士以下の兵卒で酒を飲むものは甚稀である、却て甘い物を好むのであります。それは一寸不思議なやうですが、我國の兵士、特に新兵、初年兵の教育と云ふものは、それは猛烈なもので、迚も酒などに醉ふてゐる暇が無いのであります。若し酒などを飲むで演習に出掛けるものならば、それこそ苦しくつてたまつたものでありません、多少暇で營内に居るときでも非常に軍規が嚴重でありますから、なか〳〵赤い顏をしてひよろ〳〵してゐるやうな譯には參りません、斯う云ふ風でありますから酒を飲むなどは禁じませんが、兵士自ら禁酒するやうになるのであります。それから又非常に盛に運動する場合には、飲酒家でも不思議に甘い物が慾しくなる、酒を飲めば苦しくなる、それで餘り酒を欲しがらず、反對に甘黨の方に傾くのであります、これは生理的に斯樣な關係が起つて來るものと思はれます。實際烈しい行軍や演習の時に、雜嚢の中に氷砂糖などを入れて居る兵隊は時々ありますけれども、疲勞を慰し、元氣を維持せんが爲にとて酒類を携へて行くものは決して無い、軍醫は別段酒と砂糖の利害を說いて聞かせませんでも、兵士は自然にその利害得失を實驗に依て承知して居るのであります。

尤も日本酒は「ブランデー」や「ウイスキー」などのやうに「アルコール」分が多くありませんから、一合や二合飲むだからと云ふて、その爲に軍律を亂るとか勤務の妨になるとか云ふほどのことはありますまいが、若し強行軍でも致します時に、その途中で接待したいが、酒を寄贈しやうか、金平糖を分配しやうかと云ふやうなことがありましたならば、兵隊さん

は擧つて金平糖と叫ぶに相違ありません。これは普通の人は一寸意外に思ふことであらうと思ひます。故にこれから出征軍人を犒うふに就きましても、實際は世人の想像する如く兵隊さんは決してそれ程酒を喜ばない、却て甘い物が好きであると云ふことを御承知願ひ度い。今日醫學的の實驗に於きましても、酒は一寸興奮して、速に麻痺の狀態を現はすものでありまして、急性の病氣の時に一時刺戟劑として心臟の働を強めますけれども、筋肉の力をも強めるものと思ふのは大間違であります。軍隊の元氣、その耐久力、流行病の豫防等に就ては、效力がないのみならず、却て大害あることは、前に澤山實例を擧げましたから、充分御分かりのことと存じますが、茶はこれと反對に確かに興奮劑として有效であります、充血も起さず、腦を麻痺することもない、睡眠を催すこともなく大に渴を止める效能があり、幾度飮むでも別に害はないのであります。故に我國の綠茶を以て軍隊の酒に代ふるは頗る適當であると思ひます。兎に角戰爭には酒は必要でない、却て害があると云ふことを申し上げた次第であります。

害蟲の豫防及び驅除

陸軍一等主計　由家永喜

昆蟲と云ひますのは「インセクト」で、卽ち生きて居る物、所謂動物であります。此動物を學問上から分類致しますと、動物には申すまでもなく有脊椎動物無脊椎動物と二つに分れて居るのもあります、又細胞の多少に依つて單細胞動物、多細胞動物の二つに分けて研究する方法もあります、又溫血動物、冷血動物と云ふ風に別けて研究して行くのもあります、又有益動物、有害動物の二つに分けて研究して行く方法もありますが、この昆蟲と云ひますのは一番最初に申しました無脊椎動物に屬する所のものであつて、無脊椎動物中の節足動物、その節足動物の中の昆蟲類でございます、その昆蟲類に於きまして主と

して屋内昆蟲に關して自分が調べて居ることに就て御話をして置かうと思ふのであります。

此昆蟲と云ふのは世界中の動物の中でもその數に於ては全動物の四分の三を占めて居ると云ふ位に澤山なものでありまして、從つて其種類は非常に多い、今日の學者が稱へて居る所では約四十萬種と云つて居るのであります。併ながらまだ野蠻國もあり、又森林及熱帶地方の人跡の到らぬ所、或は南洋北洋等の人跡の到らぬ所がある、さう云ふ所から昆蟲の發見せられたものが澤山あります、是等を引括めて參りますと先づ百萬種に達するだらうと云ふことは學者の論じて居る所であります、昆蟲と云ふものは其位種類が澤山ありますから從つて人類の昆蟲の關係と云ふものは非常に深いものであります、是から漸次人類と昆蟲との間にどう云ふ關係を有つて居るかと云ふことに居て御話して置かうと思ひます。それで是はもう既に動物學に就て皆さん御學びのことであつて、玆に繰返す必要もありませんけれども、話の順序と致しまして昆蟲の本體のことを申します。

昆蟲と云ひますのは頭と胸と、それから腹、大體斯う云ふ（圖を示す）風に身體が出來て居ります、此頭には一對の觸角を有つて居る、それから一對の眼を有つて居る、それから一對の口器を有つて居る、それから胸には二對の翅を有つて居る、三對の足を有つて居る、腹には尾毛及生殖器を有つて居ります、本體斯う云ふ風の身體の組立のものであります、併ながら胸部にある翅の必要がなくして全く無くなつて仕舞つたものがあります、嘗て其昆蟲の祖先に於ては翅を有つて居つたのでありますけれども、全然必要を認めないので無くなつて仕舞つたものがある、それは皆さん御存じの通り蚤、虱、南京蟲、又着物の中に居る衣魚と云ふ蟲の如きものは翅の必要がありませぬから、是が退化をして全く無くなつたのであります、又翅は一對だけで宜いと云ふので一對退化して無くなつたものもある、一對になりました所の蟲は皆さんの始終目に止つて居ります蠅の如

き、蚊の如き、虻の如きものは一對であります、それであるから學問上これを雙翅の中に入れて研究して居ります、前申しますやうに其翅が必要の有無に依つて退化して全く無くなつたものと、一對を限つて無くなつたものとあります、さういふ風に段々と必要のないものは退化して行くのでありますから、人間も成るべく身體に備つたものは必要のあるやうに使はなければ漸次退化をする憂があります、皆さんが學校に御通ひになるにも四通八達、蜘蛛の巣を張つた如く電車が出來まして必ず電車に乘る、或は車、自働車に乘ると云ふやうな風にして居りますと、段段足が退化致しまして必要が無くなるか知れませぬ、どうか折角親から貰つた所の大切な足を充分にお働かしになる方が宜いのであります、併ながら昆蟲の足に至つてはどうも其必要がありますので三對のものが一對退化したり、二對退化したり、若くは三對共退化したと云ふものはありませぬ、皆三對共足は有つて居ります、故に之を「ヘクサポット」、詰り大足蟲と申して居ります、六つ足があるから「六肢」を書いて「むし」と云ふ風に言ふて居るのであります、それで六つ以上足を有つて居るものは必ず蟲でない、蟲と云ふたら必ず六つの足を有つて居るものであると云ふことは皆さん御承知のことであらうと思ひます、中には蜘蛛の如き四對の足を有つて居るものがある、それで蜘蛛類の中に入れて研究し、又蜈蚣、蚰蜒は多足類の中に入れて動物學上研究して居るのである、昆蟲の仲間入が出來ないものである、先づ昆蟲の定義と云ふやうなものを與へるとさう云ふ風になつて來るのであります、私共が日常家屋の中に居りまして熟々人類と昆蟲との關係を考へて見ますと、多數の昆蟲の中で直接間接に人間の爲に有益なものがあり、又有害なものもあります、それで有益なものを名づけて之を益蟲と申し、有害なものを名づけて害蟲と申して居ります、併ながら宇宙間と云ふものは唯人間獨りの專有して居る所でないのでありまして、あらゆる動植物が共同生活をして

居る所でありますから、小さい昆蟲自身から言はしめたならば人間の如きは實に吾々にとつては非常な害敵であると云ふて居るだらうと思ふのであります、唯今申す所の害蟲益蟲と云ふのは是は人類の見地から名付て居るのでありまして、昆蟲から言はしめたならば決して害蟲益蟲の差別はないだらうと思ふのであります、併ながら益蟲と云ひ害蟲と申しますのも是は時に依つて害蟲も益蟲となり、又益蟲も害蟲となるのですから、是は特別として御承知を願ひたいのであります、例へて見ますれば今外國に輸出をして一億何千萬圓の金が入つて來る位の生産力のある養蠶の如き是は大昔に於きましては非常に桑の葉を食ふ所の害蟲と看做されて居つたものでありますが、今日は非常に益蟲として農家に於ては此養蠶を營まぬ所はないのであります、是が爲に此絹と云ふものは日本の特産物となつて外國に輸出して一億何千萬圓と云ふ金が入つて來るのであります、是は今では非常な益蟲となつて居ります、又蜻蛉の如きものは非常に益蟲であります、益蟲でありますけれども之を人間の生業から考へて見ますと時には害蟲と云はれて居ることもある、例へて見ますれば今金魚と云ふものが東京市中何處の緣日へ行つて見ても出て居りますが、この金魚を育てる所はズット東京の町外れの所に澤山あります、この金魚を育てる所の者は蜻蛉の幼蟲が池の中に居りまして盛に金魚の子を取つて食ひますから、是は非常に害蟲と看做して居るのであります、又この節澤山繁殖して居る所の蚊の如きは是は幼蟲の時代にはどちらかと申せば益蟲であります、是は成蟲になりまして一雙の翅を持ち、三對の足を持つて出て行つて、人の身體の血を吸收するやうになつて始めて是は害蟲となるのであります、斯う云ふ風に害蟲も益蟲となり、又益蟲も害蟲となると云ふ特例があるのでございます、そこで益蟲とはどう云ふものが數へられて居るかと申しますと、食品及藥品を人類に供給する所のもの、例へば蜜蜂の如きものは益蟲であります、又先

刻申しました所の財産を作る益の如きは非常な益蟲であります、又人間の慰安者となるもの詰り音樂者として鈴蟲、松蟲、「かんたん」、「くさひばり」など と云ふ蟲が居ります、又害蟲を殺戮する所の蟲が居ります、是等は益蟲に數へられて居ります、その害蟲を殺戮する所のものはどう云ふ種類のものが居るかと云ふと、是は家鎌切、挾蟲、或は尻上蟲と申して居る、是は家の中に居ると云ふ意味に於て言ふ蟲でありますが、蜘蛛類に屬するもの及び多足類に屬するものも自然この話の中に出るか知れませぬからどうぞ其おつもりで御聽取を願ひたうございます、又蜘蛛の中にも家蜘蛛、平蜘蛛、又後退と云ふ蟲が居ります、是は害蟲を取つて喰ひますから益蟲であります、又蜈蚣、蚰蜒の如きも益蟲である、又守宮の如き是は有脊椎動物に屬するものであります、是も益蟲であります、それで斯の如きものは成るべく保護をするやうに致しませぬと害蟲が益々殖える許りであります。

次は害蟲を申上げます、害蟲と申しますると人體の安寧を害する所の蟲、卽ち蚤とか、虱とか、南京蟲、蚊のやうなものは人體の安寧を害する所の蟲であります、又是等は實物でありますけれども、實物でない所の酒飲、煙草喫と云ふ「のみ」が居りますが、是もどうやら害蟲のやうに思はれます、けれどもさう云ふものは今日御話するのでありませぬが、人體の安寧を害するものには蚤、虱、南京蟲、蚊、所に依つては蟆子のやうなものも入つて居ります、又蠅、虻のやうなものも居ります、又病毒の媒介を致します所のものでは蠅が居ります、蠅には皆さん御存じの通り家蠅、ひめ家蠅、金蠅、黑蠅、縞蠅斯う云ふ種類のものが居ります是は捕へて御覽になりますと段々種類が居ります。

次は毛皮を嚙み又獸皮を害する所の蟲が居ります、斯の如き蟲はどう云ふものかと云ふと「いが」「こいが」毛氈蛾、是等は皆蛾類であります、又米黑蟲と云ふ蟲も居る、其外「ビートル」、卽ち甲蟲でありま

す、甲蟲に屬するものでは鰹蟲の種類が最も多くして、ひめ鰹蟲、ひめまる鰹蟲等この種類は澤山居るのであります、定めて皆さんの所にもメリンスを喰はれたり、色々さう云ふ蟲が澤山居るだらうと思ひますがどうか捕へて御研究になりたいと思ひます、又絹布及木綿類殊に糊の付いたやうなものを喰ひますのは衣魚と云ふ蟲が居ります、それから豹斑葉捲蟲豹葉豹捲蟲と云ふのは後程詳しく申上げます。

次で穀物であります、穀物は色々ありますが米を喰ふ蟲では「こくざうむし」、穀蛾、穀盗、穀盗には色色種類がある、又麥でありますと、「こくざう」、麥蛾、穀盗、豆類でありますと「まめざうむし」、又「しげざうむし」とも申します、御手玉に小豆を入れて居りますが能く蟲の喰つたのを入れたものもあるやうであります、又飯及副食物を貪食する所の蟲では蜚蠊、これにも種類が二十四種程あります、又鹽物、詰り魚肉類の鹽肉、又乾肉、燻肉、鰹節のやうなものも其中に入る、是等のものを害しまする蟲は南京鰹蟲、ひめ鰹蟲、しらが鰹蟲と云ふやうなのが澤山あります、鰹節屋に行つて貰つたら澤山居ります、又家の中には各種の蛾が居ります、又糠味噌の中には小さい蛆も大きい蛆も大分多數發生して居ることがあります、是は私共より皆さんの方が能く御存じだらうと思ひます。

次は剝製動物、獸や鳥などの剝製動物、これには矢張魚肉類に付く所の蟲と同じやうに南京鰹蟲、しらが鰹蟲などゝ云ふ蟲が多く付きます、併しながら是は脚の所に付くのでありまして、羽根の生えて居る所は餘り多く害して居らぬやうであります、何故かと云ふと彼の剝製動物は亞砒酸がその中に入つて居りますから、始終蒸發して居る爲に羽根の部分に付かないのであります、脚の所には往々今申したやうな蟲が付きます、又器具類でありますると學校の「オルガン」の如き、又桐材製品、簞笥、長持、琴、硯箱の如きものには簞笥蟲、竹心喰蟲と云ふのが付きます、又竹材製品でございますと、擊劍を致します

竹刀類のやうなものには竹心喰蟲、所皮心喰蟲と云ふのが付きます、又樫材製品には各種の車輛の圓木若くは百姓の使ひます所の鋤、鍬などの柄、又大工の使ひます鉋、鑿等は皆樫で出來て居りますが、是等のものには髪切、虎髪切と云ふやうな蟲が多く付きます、又角製類及獸骨で拵へた所のものには、ひめ鰹蟲、ひめまる鰹蟲などが往々侵害を致します、又室内の裝飾品具類、窓掛、机掛、絨氈、羅紗類を害する所の蟲が多く付きます、植物の標本には米黑蟲などと云ふ蟲が多く害を致します、又書畫及書籍類には先刻申しましたやうな衣魚、本の標本蟲、又書物蛾、米黑蟲、ひめ鰹蟲、ひめまる鰹蟲と云ふやうな蟲が多くつきます、又建築物を害する所の蟲、詰り家を喰ふ所の蟲であります、是は皆さん御存じの通り白蟻と云ふ蟲が第一に多く喰ひます、次は「なかほそかたむし」「まだらはんしむし」、さう云ふ蟲が多く害を致します、又栽培植物、詰り盆栽等の植物には各種の油蟲、この油蟲は前の蜚蠊と違ひまして蚜蟲でございます、又浴室及廚房等には蚰蜒蛞蝓の如きものが多く出まして人を厭がらして居ります、又皮革の害蟲、毛皮類を害する所のものには「ちやたてむし」「しろこなむし」とも言ひ、「こなむし」とも申して居ります、一般に「ちやたてむし」と云ふて居ります、又麻類、麻で拵らへた網のやうなものには「まだらはんむし」、又本の標本蟲と云ふのがつきます。

斯の如き種々様々な蟲が屋内に居りますがこの昆蟲と云ふものは自然發生をするものであるか如何なものであるか、是はもう今日學校敎育も段々と進歩して來まして是等の解決が充分付いて居るのでありますが、併ながら昔から申した例を少し擧げて、又現在の人の言ふ所を申して見ませうならば、昔から山芋變じて鰻になり、雀變じて蛤になると云ふことを言ふて居ります、現在言ふて居る所では今日のやうな雨降りの時に子供が傘をさゝずに行くは頭に虱がわくからいかぬと云ふ、頭に雨がふつて虱が自然に

わくと申して居ることがあります、又家の中に蚤が澤山居りますと、何故蚤が澤山居るだらうと云ふ、是は赤土があるから蚤が澤山發生するのだらうと云ふことを能く言ふて居ります、又人梅中に小麥を仕舞つて置くと小麥が變じて蛾となると云ふことを言ふて居ります、又米櫃の中から「こくざうむし」と云ふ蟲が出て參ります、何故此「こくざうむし」を防がないかと申しますと、是は米の中から自然にわいて來るのだらうからどうにも防ぎやうがないと云ふて居る、詰り米が變じて「こくざうむし」になると云ふ譯である、又皆さんの始終使はれて居る所のメリンスが變じて色々な小蟲になると云ふことを能く聞く所であります、それは昔からも色々傳説がありまして優曇華の花と云ふものを見て非常に迷信を起して誰某の所には優曇華の花が咲いたと云ふて、皆著物を著代へてお化粧までして續々見物に出掛けると云ふ向きもあつたのであります、又蚜蟲の排泄、蚜蟲と云ふものは非常に澤山繁殖するものでありますが、是が肛門から甘い汁を分泌致します、其汁を澤山出しました時には露が降りるやうにチヨボン〳〵と落ちるやうなことがあります、木の下に居つてそれを嘗めて見てどうも甘い、是は甘露が天から降つたと云ふことを申して居ります、斯う云ふ風に大分色々な傳説がありますが、實に是は吉兆である、嘉瑞であると云ふて時としては隣近所の人を集め若くは親戚の人を集めて酒盛を開いたり、或は御鏡餅を拵へて供へると云ふやうなことが昔から隨分あるのでございます、併ながら斯う云ふことはもう既に今より二百年前に伊太利のレジーと云ふ學者が能く研究致して、昆蟲が無緣に發生することはないと云ふことを證明して居ります、それで昆蟲と云ふものは決して無緣に發生すべきものでない、必ず其昆蟲の卵子があつて、卵子が孵化して幼蟲となり、幼蟲が化して蛹となり、又それが化して成蟲になる、是等を動物學上では完全變態と申して居ります、又この完全變態をしない所のもの、即ち先刻申しました衣

魚と云ふ蟲のやうらものは不完全變態と申して居ります、是から項を逐ひまして差向此人類に害をする所の昆蟲の豫防驅除法に就て述べて行かうと思ひます。

先づ最初に極く必要のものから言はうと思ひますから、蠅のことを申上げます、蠅には家蠅と金蠅とか、黑蠅、縞蠅と云ふ風に色々ありますが、其内でも家蠅が一番恐ろしい蠅である、此家蠅は何處にも澤山居る所の蟲でありますが、此家蠅の發生する事が多ければ多いだけ流行病者が多いと云ふことを申して居ります、家蠅の發生力と流行病の盛にあるとは正比例をして居るものである故に家蠅の驅除と云ふことに就てはどうしても全力を盡してやらなければならぬのである、これを保護して置くと詰り傳染病が段々流行するやうになる、故に米國のハートンなど〻云ふ人は家蠅を窒扶斯蠅と云ふて居る家蠅と云ふと人が恐しがらぬから、之を窒扶斯蠅としたら宜いだらうと云ふので窒扶斯蠅と云ふて居ります、それでどうか家蠅卽ち窒扶斯蠅と云ふのはこれの發生の多少に比例して傳染病が流行すると云ふのでありますから、どうか家蠅の驅除に一つ盡力を願ひたいと思ふのであります、然らば家蠅をどうして驅除するか、蠅の發生したものを二匹や三匹位づ〻殺してこれを以て滿足することは出來ないのである、それで蠅の發生しないやうに根本的にこれを驅除しなければならぬのでありますから、蠅が卵子を産まぬやうにする、産んだ卵子が孵化して幼蟲になる、其幼蟲の出來ぬやうにすると云ふことをやるのが一番必要であります、今申す所の驅除法は總ての蠅に適用するのでありますから左樣御承知を願ひたうございます、それでどう云ふ所に多く發生しますかを云ふと第一に塵捨場所、第二に馬小屋、牛小屋、又便所、溝の周圍等に發生を致します、是は何方かと云ふと馬小屋などが一番多いのでありますが、されはこの附近にもさうありませぬから第二番に入れたのであります、それで第一に塵捨場所でありますがこ

れに毎日お臺所邊のものを捨てる度毎に石灰を散布するか、或は片脳油を霧吹で少し吹掛けて置くか或は「グレミン」のやうなものを散布するかして置けば蠅の産卵をすると云ふことは全然ないのであります、又溝の周圍、便所の周圍にもさう云ふ風なものを毎日一回位散布すれば蠅の發生する憂はない、又幼蟲がよしや發生しました所で石灰を灰篩に一寸すくつて行つて振掛けし仕舞へば直に幼蟲は全滅するのであります、それで卵子や幼蟲はさう風にして驅除いたします、蛹になるのは無論幼蟲が蛹になるのでありますが、是はどう云ふ所に居るかと云ふと少し乾いた所、例へば馬小屋の周圍の如き半乾きになつた所及芥箱の下のやうな所、便所の周圍の半乾きの土を一寸乃至一寸五六分から三寸位ゐ掘ると茶褐色をした丁度小豆大のものがあります、又黒褐色をしたものもあります、是は能く誰にも見付かるのであります、これが卽ち蠅の蛹である、是等を殺しまするは石灰水を散布して蛹の發生しないやうにすれば宜いのであります、殊に芥箱の下などは注意する必要があるのでございます。それで成蟲はどうして驅除するかこれはもうありふれた道具、或は黐を竹の皮に塗る、或は蠅捕であるとか、或は蠅叩きを以て打つ、色々なことをして捕獲するのであります、此頃「ハイトリック」と云ふものが出來て居りまして、もう既に皆さん御承知のことゝ思ひますけれども是は(實物を示す)餘程輕便でありまして蠅が多く捕れるやうに思ひますから、今日皆さんに御覧に入れやうと思つて持つて參りました、是はゼンマイ仕掛になつて居りまして時計の螺旋を捩るが如く朝一回之を捩つて置きます、此處にかう云ふ四角な木がありまして、之に砂糖を酒なり、味淋なりで溶きまして塗付けて置く、さうするとこれが始終廻轉して居ります、其處へ蠅が大變甘い御馳走があるので止まるとクル／＼自然に廻されて底の方へ來るやうになります、此所にかう云ふ板がありましてこれに妨げられて此方へ蠅が落されて金網の方へ逃げて來

るのであります、役所には隨分蠅が澤山居りますが朝二時間位やつて置きました所が斯の如く（實物を示す）多數入つて死んで居る、まだ生きて居るのもあります、先づ器械としては少し趣向の凝してある斬新なものである、又蠅が比較的多く捕れるものでありますから玆に御紹介した次第であります、是は四谷永住町二十八番地の浦道八千代と云ふ人の所で販賣して居るやうでございます、一個が三圓ですが少し高いやうでありますがどうもゼンマイ仕掛になつて居りますからそれ位なことはするだらうと思ひます、これは朝一回掛けて置きますと十二時間や十三時間は保つて居りますから極く便利が宜しいやうであります。

次は金蠅のことを申上げます、この金蠅に就いて特に申上げなければならぬことは金蠅は非常に人體に對して惡い所の毒素を有つて居るのであります、これを東京市中で統計を取つて見ますと非常に患者が多い、若くは子供などで發熱するものが多いと云ふ工合で、又新聞などもこれを傳へて居りますが、色々原因もあらうと思ひますが兎に角金蠅の毒と云ふものは中々強い毒を有つて居りまして子供には格別害をするのであります、能くこの金蠅の豫防驅除に就てい努めなければならぬのであります、それは如何なる食物でもさうでありますが刺身の如きものを食卓に上せる時分に金蠅が來て止まる其他色々な蠅が來て止まり、殊に刺身にはよく附着するのであります、これを母親が知らずに子供の可愛さに三ツ四ツの子が御刺身下さいと云ふと金蠅の止つた刺身を取つて與へますと時として非常に毒素を排泄してありますから一時間位經過すると段々熱が出てまゐります、さうしてさあ三十七度になつた、三十八度になつたと云ふ風にドン／＼殖えてソレ氷嚢を買つて來い、氷を買つて來い、醫者に連れて行かなければならぬと云ふて家の中は大騷動して手當をしなければならぬことになります、要するに金蠅の毒素と云ふものはさう風に猛烈な毒素を有つて居ります

から、どうか刺身を食べたり、其他の食物食べぬにしてもこの金蠅等に附着されないやうに注意するのが一番必要であります、金蠅等に集らせないのみならず、先刻申したやうに總て蠅類は少しも發生しないやうに根本的にこれを驅除することに力を盡したいと思ふのであります。（以下次號）

育兒

呼吸器病の豫防法

小兒の病氣には大人と趣を異にするものが澤山あるのみならず、大人と同性質の病氣でも、大人には輕症であるが小兒に取つては危險なものが少なくありません、特に哺乳兒の病氣に至ては全く大人とその趣が異り、僅かの事も大事に立至ります。その病氣の種類を數へ上げますならば殆ど限も無い程でありますが、最も小兒に多く、又最も普通で且つ最も多くこれが爲に生命を奪はるゝ病氣は何かと申しますと、夏は消化器病、冬は呼吸器病と大きく分けることが出來やうと思ひます。

今や消化器病の多い夏も過ぎて漸く呼吸器病の多くならんする秋に際して居ります、この際呼吸器病豫防の心得ともなるべきことを少しく申上げて置くのも無益でなからうと存じます。

呼吸器病と申しましてもこれまたなか／＼一通りでは御座いません、單純の鼻加答兒も呼吸器病である、肺炎も勿論呼吸器で、病氣の種類輕重幾通あるか分かりませんが、元來小兒に最も多い呼吸病の中でも最も多いのは氣管枝加答兒と概稱せらるゝ病狀であります。從て何方も大抵この病名と症狀とは略ぼ御承知になつて居られますから、これを呼吸器の代表的疾患と見立てゝその豫防法上の注意を申上げれば宜しからうと思ひます。

氣管枝加答兒と云へば先づ咳嗽が出て（小兒は痰が

出ても皆嚥込むで外には出しません）熱が出て（熱の殆ど無いこともあります）食欲も減じ一體に不機嫌になるものであります。これだけで濟めば大したことはないのでありますが、これからもう一歩進むで氣管枝の枝の端、卽ち毛細氣管枝と云ふ部分までも侵されることゝなりますと、熱も高くなり、呼吸も苦しくなり、咳嗽をする際には顏が紫色になり、吸氣の時には心窩部から腹部にかけてひどく引込み、傍から見ても如何にも苦しさうに見えます、それから引續き肺炎にもなり得るのでありまして、小兒に取つては頗る危險な病氣であります。

扨てこれが豫防には何うすれば宜しいかと申しますと、先づその原因、卽ち何處から何うして起るかと云ふことを概略知つて居りませんと、防禦の方法も立たぬ譯でありますから、それを簡單に申上げます。

小兒の呼吸病に最も罹り易く、又最も危險なのは生後半年より三、四歳までの間でありまして、生れてから一週間の終頃には急性の鼻加答兒に罹り易い、第二箇月の中頃からは大きな氣管枝の部分に加答兒が起り易い、尙ほそれよりも後に至て初めて毛細氣管枝及び肺の病氣が多くなると申して居りますが、實際斯う云ふ傾があります、つまり生れたばかりの小兒の呼吸器の粘膜は健全であるけれども、少しく此世の風にあたりますと、先づ第一の入口の鼻の粘膜が呼吸の際に空氣と共に侵入する所の害毒の爲に侵される、それから氣管、氣管枝、毛細氣管枝と云ふやうに順次奥の方に向て病氣に罹り易くなつて來るのであります。それでは何が原因となつて氣管枝加答兒を起すかと申しますと、只今申しましたやうな具合に、既に病氣に罹り易い下地を作つたと同一の原因が強く働いて氣管枝加答兒を起すのであります。斯う云ふ譯でありますから生來虛弱な小兒、卽ち痩せてるもの、貧血して居るもの、消化不良のもの、それから滲出性の體質と云ふて、一見よく肥つてゐるやうで、緊りのないぶく／＼した性質の小兒

等は、何うしても呼吸器を惡くし易い、而かも氣管枝加答兒に罹ると斯う云ふ小兒は危險に陷るのであります。それから外の方から來る原因と致しましては季節の變り目、特に秋から冬にかけて、温度の變化の著しい時に、鼻加答兒、咽喉加答兒等に罹り、これから續いて氣管枝の加答兒を起します、更に原因として大に關係致しますのは塵埃で、外の塵埃もでありますが特に室内の塵埃が害になる、又湯上りに冷たい風に逆ふとか、年齢も體質も顧みずに冷水浴とか冷水摩擦などを妄に試みることも原因となる、それから流行性感冒、麻疹等の傳染性疾患に由て氣管枝加答兒が起る　この他にも種々の原因がありますけれども、普通は以上の如きことが主なる原因であります。

以上の事柄を顧れば自然その豫防法が分かる譯でありまして、先づ體質の惡い弱い小兒は、特に寒氣に對して注意し、鼻や咽喉が惡かつたならば直ちに治療して早く癒すやうに心掛け、一切病人に近かしめず、特に咳嗽をする人のそばに近けてはならぬ、母親でも乳母でも若し咳嗽の出る病氣に罹つてゐる際には、乳を與へる時には自分の鼻や口を手拭で覆ふて與へるやうに注意しなければなりません　又室内を清潔にして塵埃の無いやうにし、なるべく明るく通氣の良い室に小兒を置くことは極めて必要なことでありますが、我國の家屋の構造では室の温度を適當にすることは頗る困難でありますけれども、大抵攝氏の二十度前後を適當の室温と致します。冬季は空氣が乾燥し過ぎて呼吸器の粘膜を刺戟するやうになりますから、小兒の居る室には多少湯氣の立つやうに鐵瓶を火鉢にかけて置くとか、暖爐のある室ならば、その上に水を入れた金盥を置いて適當に空氣に濕氣を食むやうにすることが必要であります。黑い炭を室内で燃やしたり、瓦斯の洩れる暖爐を小兒室に置くことは極めて有害でありますから是非避けなければなりません、生來虚弱な小兒の取扱は別と致しまして、一般に小兒の身體を氣温の變化に對

して十分抵抗力を有するやうに鍛錬せしむることは必要なことであります、惰弱に育てますと僅かの氣候の變化に逢つても直ぐ感冒に罹り、呼吸器を傷めるやうになります、と云ふて四五歳の小兒を寒風に曝す如きは無謀のことでありまして、鍛錬にもその年齢、體質、季節、天候等を顧慮し、その場所時間等にも十分注意して新鮮清潔な空氣の中に於て適度に強固鍛錬の法を講じなければなりません、尚ほ冷水浴、冷水摩擦も確かに強壯の方法でありますが、元來健康な學齢以上の小兒でなければ危險があります。それも夏から始めなければなりません、今頃より始めますのには暖い室の内で微温湯で皮膚を拭く位に止めなければなりません、近來は隨分無法な小兒鍛錬法が流行致しますから、氣をつけなければなりません。最後に鼻や咽喉に故障があつたならば早速治療を加ふべきことを重ねて申し添へて置きます。

家庭衛生

消毒法の應用

北里博士は大日本私立衛生會雑誌第三百七十六號に於て、「何人も心得べき消毒法の事」と題し通俗に且懇切に普通の消毒藥の性質並にその應用法を説かれたるが、今その應用法に關する部分を左に摘録す。

消毒の方法に付いても、色々異なつた扱ひ方のある事は前に述べた通りですから、詰り夫れ〳〵の方法を巧に應用すれば宜いのです、茲に尚ほ一々物品に付ての消毒應用法を詳しくお噺し致す事にしませう。

元來消毒法の應用は、消毒すべき物と、又其病毒が何れ程強いのであるか、或は夫れ程強くないのであるか、又如何なる病原體であるか、是等を詳細に知

つた後消毒しなければなりませんから、消毒法は何れでも一樣と云ふ譯には參りませぬ。

「彼の芽萌を保有ぬ病原體は、芽萌を保有て居る病原體程、强烈なる消毒を施さずとも濟みまするし且つ消毒時間も短くして消毒が出來ます」

夫れから

「消毒藥が濃厚であれば、時間を短くしても消毒は出來ます」

又病原體の附著して居る場合をも能く考へて、其場合に應じた消毒法を行はなければならぬのです、例へば

「酸性の流動液中にある病原體を「アルカリ」性のもので撲滅せんとするには、「アルカリ」性の中にある病原體よりも其量を澤山にして用ひなければならぬ」

夫れから又斯ういふ事があります。

「蛋白質の中にある病原體を撲滅せんとする場合に多くの消毒藥は先づ蛋白質と結びついて、蛋白質が凝固るから病原體は其中に包まれて消毒藥が效を奏さぬ場合があります」

是等の事柄は消毒の方法から云ふと、餘程注意しなければ折角の消毒も遂に無效に歸します

一　天井及壁の消毒法

扨消毒を施すべき物體に就て是から一々其方法をお話し致さう玆に一室があつて其室内の天井或は壁――と申しても此壁や天井は壁土で白く塗つてある所のもの――斯ういふ物を消毒するには石灰乳とか或は石灰水を布又は「ブラシ」に附著て能くお拭きなさい、之れが一番適當した消毒法であります、然し若しも壁が「ペンキ」で塗つてある場合には

「三十三倍(三「パーセント」)の加酸石炭酸水でお洗ひなさい」

若し又壁に布が張つてあつたら

「堅い麵麭の一片か、左もなくば海綿か、或は布を水にしめし、堅く絞つて拭き取れば可いのです」

普通日本の天井卽ち板張りの天井や、又板壁を消

毒するには三プロセントの石炭酸水を浸して洗へば可いのです。

二　室内消毒法

部屋の牀板や、机や、木の椅子や、籐椅子や、戸棚や、簞笥や、寢臺や、戸や、窓や、斯くの如きものを消毒するには、

「石炭酸水を布に濕して丁寧に拭くか、若しくは石灰乳で拭いて差支ない。最も多くの場合には石炭酸水の方が宜ろしい、又石灰乳で拭いたら其儘十二時間乃至二十四時間手を附けずに置き、夫れから後に石灰乳を洗ひ落せば、最早完全に消毒は出來て居ます」

疊は何うすれば宜いかと云ふに、

「三乃至五プロセントの石炭酸水を布片に浸して充分に能くお拭きなさい」

障子に病毒汚染の廉れある時は、

「石炭酸水にて浸潤し、其紙は剝ぎとつて燒いてお棄てなさい」

西洋簞笥とか、油繪の額とか、額の縁とか、或は鏡とか、鏡の縁とか、斯ういふ類のものは、

「麵麭の一片を以て注意して拭けば宜いのです」

戸棚の上部、鏡臺の上部、窓の上部等總て塵埃の澤山たまる處は、

「石炭酸水を布か、海綿に含ませて、夫れで拭き取るが宜い」

衣類だの卓子掛けだの、敷物等の如き、若し消毒の必要あらば、

「蒸汽消毒をなさい」

扨今迄述べ來つた消毒法は、

「之れを室內消毒と稱へ」

他の場所へ取除けて消毒が出來ます、然し或場合には、物品の場所の置換へが出來ず、室內全部を消毒する事があります。其ときは、

「即ちフォルマリン消毒が必要です」

三　フォルマリン消毒法

一體フォルマリン消毒を施行するに際しては、窓や

戸の隙間や風通窓や、又煖爐の煙突の穴等、總て空氣の流通すべき場所は悉く鎖しく、其上を更に糊を以て紙を貼付け、斯うしてフォルマリン瓦斯の室外に洩れぬやうにするのが必要である、夫れ故

「フォルマリン消毒は日本の家屋には誠に不適當です、何故ならば建築が西洋館の如くでない、隙間があつて風がスースー通ひますから、如何に嚴重に窓や戸を鎖めた處で瓦斯は自由自在に室外へ逃出します、夫れ故日本室には此消毒法は必要がありません、左れども現今では西洋風の建築が多くなつて來たから、日本でも追々にフォルマリン消毒の必要を感ずるやうになりましやう」

そこでフォルマリンを以て室内を消毒するには、經臺だの、懸物だの、或は机等の物品は其儘室内に置き、成丈け物品と物品との間を隔離してお置きなさい、衣類などは、

「其室内へ紐を縱横に張り、夫れへ吊します、衣類と衣類との間は二尺位隔てゝ置かなければなりません」

要するに成可く物を累ねて層を作らず、バラリと懸げて置くのです

然し乍ら萬一傳染病患者の膿汁であるとか、血液であるとか、排泄物であるとか斯る不潔物が衣類に附着し居る場合には、

「無論蒸氣消毒に限ります、けれども貴重なもので蒸氣消毒が出來ぬなら、止むを得ないから今申す通り紐を張つて夫に吊し、フォルマリン消毒をなさい」

總ての準備が整へばフォルマリン瓦斯を室内に導き消毒を始めます

フォルマリンで室内を消毒するには、先づ蒸氣を通じて、それからフォルマリンを蒸發させます、又左もなくばフォルマリンを薄めたものを燃き蒸氣を通じても可いのです

フォルマリン消毒を行ふべき方法は種々ありますし、又其器械も澤山出來て居ます。

「我國にも田原氏のフォルマリン消毒器械が製作してある通り、歐羅巴にも種々な器械が出來て居ます」

一番簡單にフォルマリン消毒を行ふには、

「火鉢の上へ金屬製の皿を載せ、其中にフォルマリンを入れ置き、皿の下で酒精洋燈を燃きます、夫れと同時に同じ室内で湯を沸騰させ蒸氣を發します、之れでもフォルマリン消毒は結構出來ます。

孰れの器械を用ひても、單純にフォルマリンばかりで消毒は出來ません、必ず水蒸氣を通じて、夫れと一緒に施行するのです、

「フォルマリン消毒は間斷なく七時間行はなければ確實なる效を奏しませぬ、爾うしてフォルマリンを燃いた後で、直ぐアンモニアを溫めます、するとアンモニア瓦斯の爲めにフォルマリンの刺すやうな匂ひが除去て仕舞ひます。

處で室内をフォルマリンで消毒するには、夫れ夫れ割合が定つて居ます、例へば

「十立方メートルの部屋を消毒するには、四十プロセントのフォルマリン四百瓦、夫れを燃くのに費す八十六プロセントの酒精が一百五十瓦、夫れから消毒後の匂ひを除く爲め、二十五プロセントのアンモニアが一百五十瓦、夫を溫める爲めに要する二十五プロセントの酒精が二十瓦、先づ此割合で宜しいのです、大きい部屋になればなる程、總ての分量を此割合に增加しなければなりません」

尚ほ一百四十立方メートルの部屋を消毒するには、

即ち

二千瓦のフォルマリンと之れを燃くに費す酒精が一千三百瓦、消毒後の匂ひを消す爲めに費すアンモニアが一千七百五十瓦、此アンモニアを溫むる爲めに要する酒精が一百七十瓦です」

愈々部屋の消毒も濟み、フォルマリンの匂ひも消えて、全室内が安全なるものとなつたら、部屋の窓や障子を悉く明放ちて新鮮なる空氣と交換し、室内に在る物品は塵埃を拂つて淸潔になさい、之れでフォ

ルマリン消毒は出來上りました。（以下次號）

衛生上不都合の事柄（承前）

軟かいもの硬いもの

衛生とか、養生とかいふと、凡て病人の眞似をすることのやうに心得てからに、要りもせぬ藥を飮んであてもない病氣の豫防だなどゝ考へて居るものもあるが、食物も病氣に依ては、適當なものを選んで、適當に料理しなければならぬ　そこで運動の出來ぬ一體に身體の働が衰へ、殊に胃や腸の疾ある病人には、槪して軟かな消化し易い食物を與へるが、あながち齒あたりの柔いものが消化が善いといふ譯のものではない。例へば搗きたての餅は、誠にすべくして柔いが、餘り消化の良いものでない。これよりも堅餅をかりくに燒いた方が餘程消化が善い、といふのは、搗きたての餅は軟かいから、餘り咀嚼ないでも、嚥み込めるが、堅餅はどうしても軟かになるまで嚙まなければ、咽を通す譯にはゆかない。玆でまづ一つ消化液の一なる唾液が、柔かい餅よりも堅い餅の方によく混ぜられることになる、而してこれが胃や腸に到つても、緻密な餅は、消化液が中まで浸込みにくい、矢張よく嚙み碎かれて、十分唾液を混ぜられた餅の方が、遙に消化の善いことになるそればかりでなく、健康なものが、病人のやうに、何でも常に軟かいものばかり選んで食ふならば、齒でも、胃でも、腸でも、段々弱くなつて遂に其の眞似をした病人同樣になるであらうと思ふ。我邦の儀式に隨分古くから齒固といふことがある。この餅は元來、軟かいものを用ゐたものか、堅いものを用ゐたか、よく知らぬが、齒を固める目的には、どうしても堅いものでなければならぬ。軟かいものは齒に粘ばり著いて、齒を害するであらうが、堅いものはこれを嚙むによつて、齒を掃除するやうなものである、且つ堅いものをよく嚙めば、唾液も充分に分泌され、齒槽、齒齦、咀嚼筋なども强くせらるゝ譯で

ある。これは凡て只軟かい食物が善いといふ誤を正す爲に一例を擧げたに過ぎぬ、決して硬い不消化なものが善いといふのではない

茶の飲み廻しと杯の獻酬

茶は適當に飲んで宜敷いが、彼の茶の湯といふものは、風雅のすさびで、自ら衛生的に適つて居るやうな所もあるが、隨分非衛生の所も尠なくない。特に濃茶の飲廻しなどは、何れの點から見ても感服の出來ないものである。第一彼の飲むといはんよりは、寧ろ啜るといふ方が適當と思はるゝ薄茶、況んや濃茶といふものに至つては、その名の如く、甚だしく濃く、泥のやうに捏ねるのであつて、これを飲めばかなり興奮する、慣れぬものは眠を妨げらるゝに足る、而してこれがコ、アなどのやうに榮養分に富んで居るものでもない、主としてコーヒーのやうに興奮するので、逆上せるとか、通じが惡るくなるとかいふ傾がある。以上は害に近い方面を主としていふたのであるが、多少の效能も無いではない、然しなるべく煎茶の方で間合はせるやうにすればよい。これは茶そのものについての話で、濃くない實際の薄茶は一服ぐらゐづゝ飲んでも別に害にもならぬが、これを飲む方式に至つては、非難を免れない。薄茶でも一人服み終るごとに洗ひはするが、その洗ひ方たるや、極めて簡單なもので、とても衛生的の淸潔法ではない。一碗の茶を數人で飲み廻す濃茶などは全く危險なものと云はなければならぬ。各その飲口に幾千の細菌を附著けて、其處を不潔な指端や、紙などを以て拭いた位では、少しも淸潔などの意味にはならない。これは是非彼の耶蘇教の晩餐式に用ゐる葡萄酒の飲み廻はしと共に、全廢する方がよいと思ふ。

酒の效能、その害毒に就ては、今玆に述べることを省くが、これを全廢すれば、一も二もない話であるが、こゝ五十年や百年で、儀式に迄も酒を全く禁ずるやうになるとは思はれない。それでせめては、その飲み方に就てばかりも衛生的の方則を守るやうに

したいものだと思ふ。これには色々の事があるだらうが、今その一つとして杯を獻酬すると云ふ習俗は是非これは廢さなければならぬ。或人の調によると一杯の酒を一口に飲みほす時には、その杯の壁に著いて居る黴菌の數は、八千一百六十で、十杯の酒を飲干した時、卽ち十囘脣を杯に觸れた時は、二萬二千二百二十二であるといふ。又一杯の酒を二口に飲み干した後で調べて見ると、その杯の緣に附著して居る黴菌の數は、實に二萬〇八百五十四で、これを殺菌水で濯いだ後に調べて見ると、未だ一萬三千三百〇七殘つて居た、卽ち僅に五千五百四十七の細菌が洗ひ落されたに過ぎなかつたと云ふ事である。これに依て見ると、杯の獻酬には、お互にこの無數の細菌を差上げたり、頂戴致したりして居る譯で、この無數の細菌の中には、種々雜多のものが在る。時には結核菌を始として、怖るべき病原菌も混り兼はしない。盃洗で洗ふたら善からうなど丶心得て居るのは寧ろ滑稽である　今の例の如く、一寸洗つた位では半分も落ちない。殺菌水、卽ち細菌の居ない水で洗つてさへ此通りである。それを一つ盃洗、しかも始から幾多の細菌を含んで居る水を湛えた盃洗で以て、幾人かの人が數時間も、その口中の細菌を洗ひ混ぜた水が、何の淸潔を意味するものであらう。益々種々の細菌の混合物を杯全體に塗り着けると云ふまでのことである。これを以て觀ても、杯のやりとり、茶の飲み廻はし等の如何に不快なる惡習であるかゞ分かるであらうと思ふ

雜報



○軍國の國母陛下

大元帥陛下が日夜御精勵、軍國の萬機をみそなはせ給ふことは吾人臣民の恐懼措く能はざる所なるが、更に漏れ承る所によれば　皇后陛下には、この程

侍醫を召させられ戰時救護材料を一通り設備すべき旨御沙汰あり、依て直に綳帶卷軸機その他の材料を御前に捧呈したるに　陛下にはこれを以て數卷の綳帶を御手づから御製作あらせられ、侍醫に示し給ふて種々御下問ありたりと、畏きことの極みと申すも畏し。

○時局と濟生會

恩賜財團濟生會にては時局に對し、益々其の事業の普及を圖るべく、此の程理事會の議を經て、左の各項を實施するに決したりと云ふ。

一、出征及び應召軍人、軍屬の家族並に遺族の救療を遺憾なからしむ事。

出征及び充員其の他の召集に應じたる下士卒、雇傭人等下級軍人軍屬の家族又は遺族にして、疾患に罹り醫藥を自給する能はざる場合は、一層便宜の方法に依り、敏速に本會に於てこれが醫治を引受け以て救療の遺憾なきを期せんとす。

二、戰局に伴ふ失職業者の救療を遺憾なからしむること。

對歐貿易杜絕の爲め輸出品の製產に從事し居る職工及び輸出入品取扱に從事し居たる人夫等の失職業者已に續出し、延ては細民手內職の廢絕となりたるが如き狀況にして今後尙此類の者漸く多からんとするの傾向あるを以て、夫等失職業者の中疾患に罹り醫藥を自給する能はざる場合も亦一層便宜の方法に依り敏速に本會に於てこれが醫治を引受け、以て救療の遺憾なきを期せんとす。

○病院船の出航

日本赤十字社病院船博愛丸は、去る二日午前五時二十五分飯田町驛發列車には本社及び本社病院職員並に篤志看護人會員其の他數百名の盛送を受け、萬歲聲裡に發程し、翌三日午前七時五十分神戶に著下山手通五丁目兵庫支部事務所にて休憩の上、一行は午後六時港內に碇泊せる病院船に乘込み、同船は四

日正午某方面に解纜したり、猶ほ弘濟丸に搭乘すべき醫長宮入學士、高辻、難波、鮫島三醫員、飯田理事、看護婦長宮川きく子以下四十餘名の一行も同九日東京を發して神戸に向へり、因に英領加奈陀の婦人は壯麗なる病院船「アラビック」號を艤裝し、モントリールなる「マッチル」病院より來れる三名の外科醫及び同盟各國軍隊の用途に供すべく企劃し、同船はウィチャリー大佐を船長として、既にクヱベック港を出發しそれはサウスハンプトンを經て近々東洋に來航すべしと、猶ほ支那赤十字の一隊も去る二日上海を發し濟南府經由青島に向へりといふ。

○出征軍と清涼丸

三十七、八年戰役には「征露丸」と稱し丸劑を各出征軍に配與せしが、今回の戰役に於ても其の例に倣ひ渴を覺えたる際服用せしむるため、清涼丸を、陸軍衞生材料廠に於て製し、各出征軍人に携帶せしむる事となしたる由。

廣告

訂正

第二百九十七號家庭衞生欄「通俗肺結核豫防法」中（三五頁の五行）「肺炎カタール」は「肺尖カタール」の誤りに付き訂正す。

○本會入會者

○阿部恒子紹介

●札幌區南一條西九丁目十二　通常會員　宮崎八重子

○同　轉居

●相州鎌倉大町字藏屋敷七六三　中村くら子

●福岡市新大工町四十一　服部もと子

●府下下落合四三六　老泉園　三島千代子

●日本橋區濱町三丁目十　吉村看護婦會　福　トセ子

●岡山市四中山下柳川筋　岡藤ちゑ子

本ページは未詳のため白ページとしました。

本ページ（裏表紙）は未詳のため白ページとしました。